

玉木正男先生の御遺徳を偲んで

佐久間 貞行

本財団理事 玉木正男先生が6月9日御年91歳で悪性リンパ腫のためご逝去されたとの訃報に接しました。哀悼の意を表しつつ故玉木正男先生の御遺徳を偲びたいと存じます。

玉木先生は本財団創始者 故林文子前理事長が御薫陶を受けられた恩師で、臨床医学概論－放射線診療学入門（名古屋大学出版会 1984, 改訂 1990）、臨床医学概論－放射線診療学を学ぶ人のために（名古屋大学出版会 1999）の共著もあります。玉木先生は財団創立時から理事として運営に力を注いで戴きました。「健康文化」財団紀要にも放射線医学の歴史に関わる貴重なお話を中心に数多くご執筆を戴き、読むたびに先生の御警咳に触れる思いでした。

玉木先生は旧制第三高等学校から京都大学で学ばれ、放射線医学をこころざされて1936年から1942年まで、日本最初の放射線科医、慶応義塾大学藤浪剛一教授に師事されました。1992年藤浪先生五十回忌の折、玉木先生は名古屋覚王山日泰寺にある藤浪家代々のお墓に墓参されました。お墓の所在を訪ねて藤浪剛一先生の直孫である藤浪隆夫名古屋市立大学教授（現在名誉教授）を訪問され、墓参されたときその仲介をしたことが私的な思い出の一つとして残っております。

1957年長崎大学教授としてご赴任、本保善一郎先生達と心カテーテルによる心大血管造影研究の日本のメッカとなる礎を築かれました。世界で初となる大動脈造影による高安病の診断について報告されたのもその頃(1958年)のことです。そして多くの俊秀が門下に参じ研鑽を積まれたのですが、そのなかの一人が林文子先生でした。

1967年大阪市立大学教授としてご赴任、1979年ご退官までご活躍されたのち放射線影響研究所長をお勤めになりました。1990年の本財団の設立にあたっては理事をお引き受け戴き、お力添えを戴きました。

先生は学会のときもまた日頃お目にかかった折りも、何時も厚い眼鏡の奥に慈愛と厳しさを秘めた温顔で、丁寧なお言葉と特徴のある韻で、噛んで含める

ようにお話をして戴いたことを思い出しています。今はその銀髪に輝くご容姿に直接お目にかかる術もございません。今は私達の心に残るご容貌やお写真と、論文やビデオを通して触れることが出来るのみで残念です。

因みに「健康文化」にお寄せ戴いた原稿は、巻頭言の「財団紀要10号—これまでとこれから」、「戦後半世紀をかえりみて」、「ケンブリッジ大学を訪ねて」、「終戦の日に思う」、「新しい発想に立って」の5編、放射線医学の歴史を軸に題名を年代順に並べますと、創刊号の「キュリー夫人をしのぶ」、その後「IVR (Interventional Radiology)」、「日本最初の放射線科医—藤浪剛一」、「RontgenのX線に関する論文と最初に出版物に出たX線写真（特に人体病変のX線写真）」、「ウィーンの森の物語 (M RADILOGIE モの発足)」、「X線発見百周年」、「放射能発見百周年 (1896年の研究報告について)」、「ベクレルの放射能研究報告」、「人体軟部のX線検査の発足」、「ラジウム発見の報告」、「キュリー夫人の最初の研究論文」、「RADIOLOGY について」の12編、随想「人間ドック」、「花」、「論文著者名に middle name を」、「歴史的建造物の野外劇場への転用」、「「読みびと知らず」の名歌」の5編等22編です。

玉木先生の放射線医学史は一つ一つ原本に直接当たられたものであり、その経緯は旧制第三高等学校の同窓会誌である神陵文庫第15巻の「レントゲン医学の暁」に述べられています。先生のお教えに一步でも近づきたいものと思いつつご冥福を祈願しながら合掌。

(名古屋大学名誉教授、財団理事)